

会派視察所感<沖縄県那覇市>

岩田 淳司

視察事項：若狭公民館の指定管理者による運営について

公民館の取り組みとして日本一で表彰されているこちらに伺ったが、実は地域自治会への住民加入率が15.9%ということには正直驚いた。お話しを聞くと若手住民の加入率の低さは深刻なようであり、ここでもいわゆる「やる人ばかりがやっている」感はあるようだ。しかし館長・宮城さんのリーダーシップは素晴らしい、いわゆる経営的な視点で「課題設定ー企画ープロセス評価ーインパクト評価」といった企画づくりのジャバラ帳を開発し積極活用されている点は勉強になった。

広報誌を13000部発行しており、その費用は全て広告収入で賄っている点、広告主も安定しており発行しても確実に黒字が見込まれる点なども驚いた。そもそも公民館の広報を広告収入で作成するという発想から感心した。館長いわく「公民館はやることが確定されていない」ので自由に発想してよいという感覚が素晴らしい、おそらく公務員による直営では職員からはこういった発想は出てこないだろうと考える。裏を返せば指定管理者による運営であるから

財源となる市からの指定管理料だけに頼っていたのでは充実した活動ができないというポジティブな感覚もあるのだろう。

企画・活動内容も素晴らしく、うみそら上映会、放課後やひとり親の児童生徒のための無料英会話教室や土曜朝塾、防災紙芝居やシングルマザー支援、移動図書館による公民館不在地域（那覇市には小学校区レベルでの公民館数がなく、市内でわずか7しかないとのこと）への出張公民館「パーラー公民館」などの取り組みもたいへん勉強になった。

指定管理による運営は直営と違いスタッフが長きにわたり地域の住民と企画運営に携われるので、活動のノウハウを蓄積できるという言葉にも納得させられた。わが市でも、市民センターの運営での指定管理者による運営はまだ数えるほどであるが、こういった視点で見ればそのメリットも見えてきた。今後更に研究しつつ、すぐできる取り組みなどは積極的に行政に提案していきたい。

会派視察所感<沖縄県沖縄市>

岩田 淳司

視察事項：沖縄こどもの国（動物園）の取り組みについて

園内はアップダウンがかなりあり、正門側から一周すると最後はエスカレーターに乗り戻ってくるような造りである。決して廻りやすいとはいえないが平成16年のリニューアルオープン以来ずっと入園者が増え続けており、平成17年度の30万人強だったそれは平成29年度は50万人弱までになっている。説明によるとそれはリニューアルオープン時に部長級待遇として全国公募し、これにより就任された西川氏の手腕に頼るところが大きいとのこと。手渡された資料には月別入場者表や各種イベント・体験事業の内容、参加人数など、事細かく記載され、前年度との比較、分析などがなされており、30年度事業の報告書だけで30ページに及んでいる点などから、データ収集とそれを次にどう生かしていくか等の戦略性が優れているのではないかと感じられた。

園内に「ワンダーミュージアム」という、子どもたちに遊ばせながら科学に触れさせる施設もあり、視察当日が平日の昼間であったにもかかわらず幼児連れの親子組がいくつも見られた。うちにもこ

のような施設があれば来園者も増えるであろうが施設の維持管理費はそれなりにかかるとのことであった。そのため、その施設への入館料は200円別途にかかるシステムであり、これについては一本化されたいとの要望も多く、次の指定管理期間では検討を要するとのことであった。

一見わが市の動物園との共通点は少ないようにも思えたが、こどもの国のように事業へのP D C Aを本当の意味でしっかりしていくことが重要だと改めて考えさせられた。

会派アクティブ 視察報告書

報告者 清水 芳将

視察先 沖縄県那覇市

視察項目 若狭公民館の指定管理者による運営について

日 時 平成 31 年 1 月 16 日 10:00~12:00

所感

○ 那覇市本庁地区の自治会加入率が 15.5%と示される通り、公民館という位置づけが本土とは全く違っている沖縄に於いて、課題設定と企画作りから始める公民館運営という形は大変興味深いものであり、地域づくりという観点からも現況を再考させられるインパクトもあった。

○ H4 年会館で H16~21 年度は民間公募の非常勤館長採用、H22 年度からは自治体職員館長以外の業務を NPO 委託という業態を経て、H27 年度から完全な指定管理者制度に移行したとの事だが、現在でも那覇市にある 7 館の公民館の内、2 館しか指定管理に移行していない実態に鑑みると、運営に関して地域づくりに対するかなりの大きな熱意を持った団体の存在がなければ成り立たないことが推察される。

現行の指定管理者である NPO 法人地域サポートわかさが、「全国公民館ホームページコンクール」に於いて「最優秀賞」を受賞したことや、第 70 回優良公民館表彰を「最優秀館」として文部科学大臣から受けたことを機に、全国からこの取り組みが注目されて、今回の我々の視察にも結び付いてはいるのだが、地域における生活保護率が 6%を超えて、なお且つ県内有数の歓楽街を有している地域でもあり、那覇市内の夜間保育園のほとんどがこの地域に集中している状況の中で、急激な在住外国人の増加による地域住民との

軋轢にも対応しながらの運営は、館長の熱意に加えて大変参考になった。

総合的な地域課題の設定時に於いて、こどもと在留外国人を明確にしての企画と分析に力を入れている点や、中長期的な社会変化をイメージしながら企画・検証を行っている点、情報発信の基本となる広報わかさの編集に強く力を入れている点等は、我々個々の地域に於いても改めて考察してみるべきもので、勉強になった。

就学援助やひとり親世帯対象の無料英会話教室や、映画制作会社とボランティア+公募のこどもスタッフによる国際映画祭の開催、住民の発案から生まれた月1回の「朝食会」、中折でA4版6枚分カラー刷りの広報わかさ（隔月9,500部発行）の出来栄え等は特筆すべきものである。

資料別紙

会派アクティブ 視察報告書

報告者 清水 芳将

視察先 沖縄県沖縄市

視察項目 沖縄こどもの国（動物園）の取り組みについて

日 時 平成 31 年 1 月 16 日 14:00~16:00

所感

本土復帰を記念して 1970 年こどもの日に開園し、水族館設置や料金改定を繰り返しながら一定の地域認知度と人気を保持してきた施設が、平成 2 年の遊園地オープンを機にバブル景気も手伝って最高入場者数 55 万人と大きく記録更新し、その後 10 年持たずに遊園地閉園と運営主体の交代に及ぶという事態も非常に興味深い事象だったが、休園後の H15 年度からの、沖縄こども未来ゾーン運営財団による将来ビジョンをしっかり持った運営形態は、更に興味深くたいへん勉強になった。

H16 年度から元全日空社長の西川氏を園長として迎え、H18 年度からの指定管理移行に備え、象の来園や公益財団法人化、ワンダーミュージアムリニューアルや周年事業としての座談会の開催等、大きな企画も年次を踏まえて実現している点は、我が市の将来計画にとっても留意点として参考になった。

現園長である説明者の言葉の中で、ミュージアムがリニューアルした際に、前園長の西川氏が入園料とは別に入館料を取ることを提案されたとの話があったが、人件費の高騰を見越したうえに 88 名の従業員を抱えて持続可能な将来像を描くためには、重要かつ必要な決断であったように思われる。

インバウンド効果が大きいとはいえ、人口 15 万程度の沖縄市として年間 49 万人の入園者を H29 年度で達成しているうえに、隣村

の用地に拡げて現在の2倍の広さにする計画が、H38年度までにという形であるとの事だったが、今後も動向を注視していきたい。

H26年度とH29年度は単計として赤字だが、繰越や内部留保によって外形上は黒字であり、指定管理料には反映されないと点、動物の買入れ費等は別途予算があるという点、5月ごろからボランティアを募集して夏におばけ屋敷を開催している点、ペンキ塗り等修繕作業や生き物ガイド等の多彩なボランティア活動を用意している点、ワンダーミュージアムは動物に関するものに限っているわけではない点等を特筆しておく。

○
大変参考になる有意義な視察であった。

○
資料別紙

視 察 報 告

日 時 平成 31 年 1 月 16 日(火) 10 時

場 所 那霸市 若狭公民館

内 容 若狭公民館の指定管理者による運営について

○ 若狭公民館は 2010 年から「NPO 法人地域サポートわかさ」が運営業務を那霸市から受託している。優良公民館表彰において何度も「最優秀館」に選ばれており、全国的に注目されている。何が違うのか、何が大事なのか、大変興味を持った。

○ 若狭地域は琉球王朝時代からの海の玄関口で、歓楽街も有する地域である。自治会加入率は約 16% と驚く程に低い。(那霸市全体の自治会加入率は、17.5%) そんな環境で、どうやって地域づくりや地域の絆がつくれるのか、つくっているのか。

○ 那霸市には 7 つの公民館しかない。そのうち 2 館が指定管理者が運営している。元々は全てが直営であったが、行財政改革の一環として指定管理者制度が導入された。指定管理者である若狭公民館の館長の宮城 潤氏は、ちょうど直営から指定管理への移行期に社会教育について専門的知識がないが縁あって 2006 年から非常勤職員からスタートし、3 年間の非常勤館長を経て、指定管理者の館長を務めている。つまり 15 年も経験を積み重ねていることになる。

○ 自治会加入率が著しく低い地域にあって、どのようにして地域力を向上させるのか。「全ての人を開かれた公民館」を目指し、兎に角公民館に来てもらうために、6 つの目標を定め取り組まれており、独創的な企画が目白押しである。青空公民館として黒板とパラソルだけの「パーラー公民館」(移動式)、「ちょこっとハロウィン」とよく考えるものだ。

行政側が指定管理者制度を導入する効果の一つが直営の場合より費用を押されることにある。しかしあまり行政側の都合を優先すると、応募する事業者がいなくなる。若狭公民館においても過去にそのような事例が生じたようである。この点は、配慮が必要である。

館長さんは、直営の公民館 5 館と民活の公民館 2 館の評価が大きな財産であり、お互いに情報交換や交流によって、直営の公民館でも

同じようにできる。長い経験がポイントになるという話には、思わず唸った。確かに、直営の場合には、担当者は数年で交代する。指定管理の場合は、専属で長く務めることにより、新たな展開が可能になる。さらには、指定管理の場合には、毎年モニタリングを受け、評価される。そのことの積み重ねが財産になる。その財産を直営の公民館も共有することで、総合的な質的UPに繋がっている。

なかなか周南市の状況にあてはめることは難しいが、考え方等大変勉強になった。できない理由を探すより、できる理由を見つけることが大事である。

(文責 土屋晴巳)

視 察 報 告

日時 平成 30 年 1 月 16 日(火) 14:00~16:00

場所 沖縄こどもの国(沖縄市)

内容 沖縄こどもの国(動物園)の取り組みについて

沖縄こどもの国は 3 つの機能から成り立っている。1 つはネイチャーランド事業(動物園機能)、2 つめはワンドームミュージアム事業(オリジナル企画展及び展示開発)、3 つめはチルドレンズセンター事業(沖縄の自然・文化の発信、人材育成、こどもを対象としたプログラム等の展開)からなりたっており、連携しながらの集客 UP に努めている。徳山動物園は、発祥経過や土地面積からも動物園機能がメインであり、これはしかたがないし、無い物ねだりをして仕方がない。

入場者数は平成 28 年度 456,717 人、平成 29 年度は 493,645 人(開園以来、No2 の入場者数)と年々増加傾向にある。これは、この施設は沖縄市立であるが、県内唯一の動物園として、沖縄県からのバックアップもあり、沖縄県主催のイベントが多く用意されており、広報も全県にしている。更に、県の主導で、隣地の山を開発し園のエリアを広げる計画もある。県のバックアップという点は、徳山動物園と大きく異なる。

しかし、沖縄こどもの国の歴史をみると昭和 47 年にオープンしその年の入場者数が約 36 万人で一番多く、いわゆる伸び悩みの時期が約 20 年続いている。入場者数 UP のため、よくあるパターンであるが平成 2 年に御多分に漏れず、遊園地をオープンし、過去最高の約 55 万人の入場者数を得たが、その後、バブルの崩壊もあり一気に右下がりの現状に直面し、平成 11 年には遊園地を閉鎖している。遊園地は人気回復の起爆剤にはならない。やはりソフト面の充実が必要である。

また、オープン以来市の直営で経営していたが、平成 16 年の未来ゾンリニューアルを契機に、平成 18 年に指定管理制度に移行し、園長を全国公募している。この初代の園長が、現在の礎をつくられたようで、その後、年々入場者数は増加している。指定管理者制度の導入が、成功した事例である。平成 24 年度からは広域法人化になっているが、これは県内唯一の動物園という状況からして当然の方向と思う。

ボランティアの募集に積極的に取り組まれている。個人ボランティアだけではなく、団体ボランティア、短期ボランティア、こどもボランティアと多岐にわたっている。この点は参考にすべきと思う。

徳山動物園は、オープン以来市の直営で運営しており、指定管理者制度の導入という話はない。入園者数も約 30 万人弱という状況で、この数字は、周南市の人口の 2 倍であり、他市からも来園されているといえる。

歴代の園長を始め、職員の努力でここまでできている。全園のリニューアルにもまだ数年かかる。徳山駅前図書館と動物園の連携による入場者数の推移について、これからも注視していく。

(文責 土屋 晴巳)

「若狭公民館の指定管理者について」（沖縄県那覇市若狭公民館）

日時：平成31年1月16日 午前10時～

沖縄では歴史的背景から公立公民館より自治公民館が多いという状況だが、那覇市では小学校36校、中学校17校の市域に公民館は7館あり、前の例に反して公立公民館が多く、うち2館が指定管理制度をとっている。

○ 今回訪問した若狭公民館は全国の優良公民館表彰で「最優秀賞」を受賞した施設で、大変活発な活動を行っている。私立図書館（他7館も）も公民館に併設している。施設の管理は1階を持っている部署が行うという決まりがあり、若狭公民館の施設管理は行政が行っている。（職員6人）

指定管理者は平成27年から「NPO法人地域サポートわかさ」となり、メンバーは地域住民（自治会長など）が中心となっている。地域の街づくりを考えるフォーラムを行ったことがNPO法人誕生のきっかけとなったが、それは公民館の運営が民間に移譲されて地域の実情を知らない企業が来ても困るという思いから、その受け皿となることを目標とした。以来、活発に事業を行っているが、この地区の自治会加入率は15.5%と低く、地域の意見を十分反映できているのかは課題である。また生活保護率も6.2%、子どもの貧困率も高く子どもの多様な体験、居場所が必要である。

また地域的に歓楽街も近いことからひとり親家庭や夜間保育園が多く、また外国人労働者・留学生が急増するなど（3年間で75.6%増）特有の地域事情がある。そこで特に力を言えているのが情報発信と青年層には楽しみながら関われる場づくりなどを行い工夫している。広報誌をカラーに変更して（1万3千部発行）、印刷費の足しに広告費をもらっている。（市の広告基準に準じたもの）

また配布は公益的なものということで新聞販売店に無料で折り込んでもらっている。こうした取り組みの結果、この広報誌は全国の表彰を6部門で受けることになった。

若者を取り込むためにまずは知ってもらい、関わってもらうことが重要なことから公民館で寝泊まりする公民館合宿（イベント企画ワークショップ）を開催し、そこから生まれたのが朝食会だ。

この朝食会は、おかずを1品持ち寄りゆるく参加できる毎月1回のイベントで、10年以上続いている。続けていると全国の他の公民館との交流や子育て世代の悩み相談などもあった。また野外上

○ 映会も青年の発案によって始まった。

子どもの居場所となる取り組みは、妖怪探しや無料英会派教室、大学生が教える勉強会などをやってきたが、交流の中から子どもたちが自分の人生を見つめ直すきっかけとなっている。また「子ども国際映画祭」のスタッフやジュニアジャズオーケストラに声がかかり、子どもたちが参加している。その他、防災紙芝居、おもちゃの交換会と防災を掛け合わせたイベントを開催している。

○ シングルマザー向けの取り組みとして子育て相談を行っているが、当初はなかなか人が来なかつた。しかしイベントによってシングルマザーを支援するNPOとつながりができ、活動に広がりができた。NPOとのつながりから見えてきた婚姻歴がない一人親だと控除が行われないという問題を取り上げ、講座やシンポジウムを開催して、行政の支援につなげるなどの成果につながった。

最近増加しているネパール人とのつながりを活用して、ネパールの元日を祝う交流イベントも開催している。

若狭公民館の範囲は広く、カバーしきれない空白地域を解消するために、公園にテーブルとパラソルを設置して人の集う場「パーラー公民館」を作っている。この着想は昔開いていた青空公民館

で、今では月に1回くらいワークショップやただおしゃべりする場となっている。（歴史講座、移動図書館などを含めて）パーラー公民館の開催が、やがて子どもたちが自主的にごみを拾ってくれるきっかけにもなった。こうした若狭公民館の取り組みは話題となり、オロナミンCのCMにもなっている。

公民館の大きな課題は、施設のポテンシャルは高いのに一定の人しか利用していない。広く届いていないことがある。また対象者は幅広く、職員の必要とされる能力も幅広いものが求められてい

るが、行政からは地域の声にこたえろとしか言われない。職員のアンテナをしっかりと持たないと何をしていいかわからない。来てほしい人が来ていないが、人は来ているのでそれに気づいていい。こうしたものを解決するために職員の手引書を現在作成している。またイベントの評価も参加者などだけでなく、目的に沿った評価指標など幅広い成果を考えられるようになった。

那覇市の残り5館も指定管理者制度の導入を検討しているが、現在の2館がよく出来過ぎているので、手が上がらない状況になっている。指定管理者制度で重要なのはどういう人がやるか。直営を言い訳にしてできない理由にもしている。指定管理者は利用者に対してモニタリングを行いそこからの気づきがあるが直営には無いことは問題ではないかという事。自己評価や改善が蓄積されないことは直営には多い。

また全国公民館連合会の発刊している「公民館はどう語られてきたのか？」という冊子をいただく。この作成に若狭公民館が大きくかかわった。

(井本義朗)

「沖縄こどもの国(動物園)の取り組みについて」(沖縄市沖縄こども園)

日時：平成31年1月16日 午後13時～

「沖縄こどもの国」は本土復帰の記念事業として1970年に開園した。当時この開園にあたって全国の小学生から10円寄付などを受けた。平成16年に施設のリニューアル、18年に指定管理者制度に、24年に公益財団法人に移行している。今年度で5年間の指定管理期間が終了する。入場

○ 者は年間約30万人だが、平成元年に遊園地がオープンして急増するがバブル崩壊とともに落ち込んだ。しかし沖縄県の唯一の本格的な動物園を守ろうという機運が高まる。そこで平成16年に遊園地をやめてワンダーミュージアム、チルドレンズセンターを整備する。リニューアルに伴い園長を全国公募して、民間登用を行った。近年も各所リニューアル整備を行い、平成29年度の入園者は約40万人に増加となった。様々な企画を定期的に行い、お客様に飽きさせない工夫や広報に力を入れるなど地道な努力が功を奏してきたと考えている。

○ 県からも補助金をもらっており、半分が指定管理料で賄い残りは自分たちで収益を上げている。収益の大部分は遊具、売店などで上げている。従業員は88名。

動物園の事業では飼育体験、乗馬体験などの動物園でも行う事業とともに、教育に関わるような非収益事業も行っている。長期休暇など集客の多い時期にイベントをうっている。

体験事業に個人、団体、子どもなどに対してスタッフとしてボランティア（2300人登録）の募集を行っている。参加者は親子、女性、生き物好きな方が多い。

入場料は大人500円、中高200円、小学校以下100円。ワンダーミュージアムの入館料は別途

で大人 200 円がかかるが、初代館長が継続のためには取るべきだとの主張から取るようになった。

(年間 2000 万円の収益) アジア圏からの来園者は現在年間約 5 万人。来年度の消費税の増税に伴って入園料の検討を再度行う予定である。沖縄市の市民と観光客の入園料の金額を変えることも考えている。

エネルギーコスト削減に取り組んでいるが人件費の上昇に悩んでいる。

アジア各国に対する旅行代理店やインフルエンサーへのアプローチを行っているが、専門部署の

○ 設置などは今後の課題と考えている。

今後、隣の北中城村の山林用地を活用して、10 年後の完成を目指して園を倍増する計画をもつている。

○

沖縄県那覇市 会派視察報告書

「若狭公民館の指定管理者に運営」について

平成 30 年 1 月 15 日 山本 真吾

那覇市は自治会加入率が約 15% と低く、生活保護率は高い。また、若狭地区は歓楽街があり、那覇市内の夜間保育園が集中している。ひとり親世帯の子どもや在住外国人も多いようで、なかなか複雑な地域であると感じた。

那覇市には全部で 7 つの公民館があり、そのうち 2 つが指定管理による運営を行っている。その中の 1 つが NPO 法人地域サポートわかさが指定管理者である若狭公民館である。

若狭公民館では、一部の人の場ではなく、地域の課題に取り組むことで「全ての人に開かれた公民館」となることを目指して様々な取り組みを行っている。おかげを一品持ち寄り気軽に参加できる「朝食会」や、そこから生まれた企画「100 人でだるまさんがころんだ」は「入りやすくて抜けやすい」「頑張らない」をモットーに朝食会のメンバーを中心として企画運営されている。

この「がんばらない」というモットーは組織を長く維持していくためには大変重要な要素だと思う。

他には、母子世帯対象の子育て講座をきっかけとして若狭公民館での当事者支援の定例会を設けるようになったほか、支援者向けの研修を企画開催するなど、地域の実情に応じた企画が開催されている。

その他にも公民館には様々な行事や団体の会員募集の張り紙が沢山貼られており、大変活気のある場所だと感じた。

若狭公民館は情報発信においても熱心であり、ホームページはもちろん、ブログ、ツイッター、フェイスブック、メルマガなどネットを活用し行っているほか、「広報わかさ」は隔月で約 13,000 部を発行しているとのこと。

若狭公民館の取り組みをみて、やはり直営より指定管理の方が柔軟で新しい発想、長期的な視点での運営ができるのかなと感じた。ただ、必ずしも周南市で今回の成功事例が当てはまるとは限らないが、若狭公民館の事例を今後に活かしたいと思う。

沖縄県沖縄市 会派視察報告書

「沖縄こどもの国(動物園)の取り組み」について

平成 31 年 1 月 16 日 山本 真吾

沖縄市にある沖縄こどもの国は 1972 年に本土復帰記念事業の一環として誕生した動物園である。

経営悪化により併設されていた遊園地を閉館するなど、厳しい状況が続いていたが、2004 年のリニューアル以来、ほぼ毎年入場者数を増やしている。

一時は 10 万人を割っていた入場者数も、2017 年度は 49 万人にまで増えている。

集客力向上の理由は様々な取り組みの成果の結果であり、今まで市の部長や退職者が就いていた園長を公募制に変え外部人材を活用したこと、直営から指定管理者制度に変えたこと、他にも、子供たちに科学について知ってもらうための「ワンダーミュージアム」や、沖縄こどもの国を支援するボランティアの活動拠点「チルドレンズセンター」の設立、展示数の増加、斬新な企画のイベント開催などが挙げられる。

園内では様々なイベントが行われ多くの集客を集めているが、職員の負担が大きい主催イベントよりも、今後は外部イベントの誘致に力を入れたいとのこと。そのためには営業活動専業の職員の配置が必要であり、今後の課題とのこと。近年、外国人を中心に来園者がさらに増加傾向であり、施設が手狭になったことから、拡張計画を進めている。周辺の土地を買収し、敷地を現在の約 2 倍の大きさにし、数年後には大きくリニューアルする予定となっている。現在は平日以外の駐車場不足が深刻とのこと。

今回の視察で最も特筆すべき点はエサやり、接客、草刈り、ベンキ塗りといった作業のボランティアに年間のべ約 2,300 名の方が参加されるということである。

これは動物園としては人件費の削減につながり、市民としては動物園への関りや思い入れを深めることができる素晴らしい制度であり、是非周南市でも取り入れてみてるべきだと思う。